

Title	文明開化期における日用雑器の発生と形成
Author(s)	後藤, 勇雄
Citation	デザイン理論. 1976, 15, p. 43-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53747
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

文明開化期における日用雑器 の発生と形成

後 藤 勇 雄

〔I〕

旧時代から新時代へと移り行く変わり目というものは、平穩な時代には見られない様な現象が見られるものである。縄文時代から弥生時代への移行期に見るまでもなく、新しいものの発生も多くこの様な時期に見られる様に思う。全く異質の西欧文明が滔滔と流れ入る文明開化という驚天動地の時代においてもこのことは云えるであろう。

ここに取り上げる日用雑器の類に関してだけでも実に様々なものがこの時期に生まれ、或いはもたらされている。

ものの発生、形成の過程というものは必ずしも一様なものではない。この時期のものの場合も、発生、形成の仕方には幾つかのタイプがある様に思われる。ここでは汽車土瓶、ランプ、ガラス食器、洋食器について、その発生と形成の過程を概観し、夫々の発生、形成の特徴を考えてみたいと思う。

〔II〕

云うまでもなく、汽車土瓶の発生は鉄道の開通と関係がある。

明治3年(1870)東京・横浜間、大阪・神戸間に鉄道敷設工事が起工され、明治5年には東京・新橋・横浜間が開通、明治7年には大阪・神戸間が開通する。

更に明治10年には京都・大阪・神戸間が開通し、13年には京都・大津間、そして22年には東海道全線が開通するのである。

街道筋にはまだ茶店があり、賑わいを見せていた当時、膳所駅で鉄道工夫をしていた萩山平兵衛（山口県萩出身）なる人物が、駅で売店を出すことを考えつき、大津駅、京都駅に「萩乃家」として店を出し、更に駅でお茶を売ることを思いついたのが抑々の発端となる。

彼は信楽町神山の陶工村瀬音次郎に製作を頼み、これの実現を計った。汽車土瓶第一号は、形は薩摩型、画付は当時流行していた山水土瓶の模様を模写したもので、二合入り位の大きさのものであった。当時の信楽は土瓶の生産でも知られており、技術的には大した苦勞もなかったはずである。

普通の土瓶を1合から2合位に縮小しただけの様な汽車土瓶が、如何に新時代に合致したものであったかは、以後次第に鉄道が開通されていくにつれ、需要が伸びていったことでも知られる。それに従って製作地も増え、瀬戸、美濃小名田、伊賀丸柱、立杭、青梅、益子、佐賀皿山など各地で製作され、益子でも生産の大半を汽車土瓶が占めた時期があり、また信楽町神山でも汽車土瓶主体の窯元が30軒、陶工300人がいた時期があったという。

その後ガラス茶瓶の登場により、土瓶は廃止され、ガラスものに改正されるが、昭和5・6年頃にはまた土瓶が復活している。これは「ガラス容器ではお茶をのむ気分がよくない」という世論が高まったからであった。この時に手轆轤から機械轆轤、石膏型にきり替え、大量生産を目指すと共に、また機能的にも蓋が湯呑みにもなる様工夫され、「近代化」される。「近代化」の最先端に現在のポリ容器が存在しているわけである。

〔Ⅲ〕

石田研堂の「明治事物起源」ランプの始めの条に、林若樹氏談として「万延元年渡米したる友人より、土産物として林洞海に贈りたるものにランプあり。

油壺は総金属製にして、ホヤはバネ抑へなり。珍物として来客ありし時などに使ひ居しが、石油尽きて得るに道なし、因て越後より……（中略）……予も久しく用ひたるが、後にはホヤ抑へのバネ利かざりたれば、空しく仕舞ひおきたる話がのつており、また明治32年8月時事新報、越後石油の記事を引いて、「安政開港の後、外国よりランプの輸入するあり、江戸・横浜の如きは、之を用ふる者漸次に増加し、越後地方にもポツポツ之を用ふる者」のあったことを述べており、明治を待たずして輸入ランプがわが国でも用いられていた様子を知ることが出来る。

明治に入ってから、ある程度一般的に使用されつつあった様である。また明治5年頃には東京ではランプが流行しており、ガス燈の普及する明治30年頃までランプは全盛時代をおくるのである。

ランプの普及にともないランプ火舎（ホヤ）の国産化の必要性が痛感されるようになる。輸入品では破損した場合、取替に不便があるからである。

わが国の火舎製造は、明治以前においては福岡藩が安政年間に、佐賀藩が万延年間に行っている。また民間では、慶応2年、当時ガラス製造の先進地であった大阪で、ピードロ師久米長兵衛、伊藤庄太郎の兩人によって作られている。尤も、長兵衛や庄太郎の頃はまだランプが普及していず、高価につくことなどの為仕事も思わしくなかったという。その後、渡辺貞助、小島四郎兵衛、駒屋新七、高田屋源四郎、玉屋平四郎、阿波屋弥七、大和屋安兵衛、金屋惣兵衛、真田寿兵衛等のピードロ師、即ち和吹業者が油壺、火舎の製造を主たる業務としており、明治10年頃には、大塚治兵衛、和田源次郎が熟練工として有名であった。

東京では、明治4年加賀屋久兵衛の弟子沢定次郎が火舎の製造を始めたのが最初で、明治6年には名古屋の人伊藤某が油壺の製造を行っていたことがあるという。また、明治6年、丹羽正庸、村井三四之助により、板硝子製造の目的を以って品川に創立された近代的ガラス製造所・興業社は、明治9年政府に買

上げられ工部省品川硝子製造所となり、副業的にランプ用火舎、油壺、ガス燈用火舎等が舶来吹きによって製造されるが、これにより市中の製品も改良されるようになる。その後明治16年、沢定次郎の弟子で、ながく品川硝子製造所に居た岩城滝次郎が京橋区新柴町に工場を開き、ランプ類、ガス燈用火舎等を作っている。これは民間では初の舶来吹きによるものであった。

京都では明治3年舎密局を設置し、ヘルツ及びワグネルを招聘し食器などと共にランプを作っている。

愛知では明治3・4年頃石塚文左衛門が薬壘の傍ら火舎を作り、明治8・9年頃には谷半十郎、八神幸助、松本新平、広田吉五郎などがランプ用火舎、油壺類を作っている。

石川では明治8年頃芦沢次三郎が火舎、油壺を作っている。

長崎は、江戸初期に浜田弥兵衛、生島藤七等によってガラスの製法が伝来された所であるが、一時中絶し明治11年に至り小曾根正樹が石炭を燃料とし、洋式製法によって食器等の他火舎を製造し、明治13年には火舎を香港へ輸出するまでになっている。

新潟でも明治10年頃、五泉玻璃製造会社がランプなどを作っている。その他福島では磐城平町に近代的な磐城硝子株式会社が決沢栄一、浅野総一郎等によって設立され、専ら硝子屑を原料として火舎及び壘類が作られ、また仙台市でも末葉には佐藤易三郎、中村文六、佐藤胞衣治、佐藤栄治の四工場があり、蠅取り器、湯呑、共台ランプなどの他、火舎、油壺を主として作っていた。しかし、これは幼稚の域を出なかったという。

この様に遅速の差こそあれ、日本各地で製造されていたことは興味深い。これは需要層が厚いこと、交通・輸送機関が未発達であったことが大きく関係していよう。大部分は産地附近の需要を対象としたものであった。

一方火舎、油壺の他にシェードがあるが、これにはランプ用、ガス燈用、電燈用がある。ガス燈は明治6年に点火されて以来徐々に使用者が増え、明治27

年に25,274の燈数を数え、以後も漸次増加し、明治44年には急激に増加して前年の約2倍の84,014の燈数にまで普及する。

電燈については、明治20年東京電燈会社が開業し、翌21年には神戸電燈会社が、22年には大阪、京都、名古屋の各電燈会社が、また23年には横浜電燈会社、24年には熊本電燈会社という風に次々に開業されるに従い電燈もめざましく普及する。即ち明治36年末戸数365,090であったものが、明治44年末では、戸数3096,516にまでなっている。この様なガス燈、電燈の普及を背景に、シェード類の製造も発展するのである。

当時、シェード類の製造業者は二種類あり、一つはランプ及び電燈用乳白色ガラス製の石笠を製造する石笠製造業者と、他の一つは透明ガラス或いは透明ガラスに色ガラスを配合して作られたガス燈及び電燈用のシェードを製造するシェード製造業者である。大阪では石笠及びシェードは同一業者がこれを製し、東京では食器雑器製造業者がシェードをも作り、石笠は石笠専門の業者がこれを製造していた。製法が異っている為であろう。

石笠は、当初輸入されていたが、その後国産化されるようになり、工部省品川製造所で初めて作られる。その後東京では明治26・7年頃に河野松五郎、中島浅次郎らによって設立された民間の東京石笠合資会社で製造されるが、まもなく解散し、松山鉄磨、八木良太郎が石笠の製造に携わる。

当時石笠は舶来品の破片を買集めて再熔して作っており、この破片の蒐集に左右されることが大きかったため、きわめて不安定な状態におかれていた。明治30年末、40名に達する製造家が早いものは数ヶ月で廃業する状態であったという。

大阪における石笠製造は民間では東京より早く、明治21年頃、赤松弥兵衛、近山太兵衛等により設立された日本石笠合資会社と、明治22年頃駒井庄太郎、岩井勝平等により設立された製硝合資会社によって行われたが、日本石笠合資会社は数年にして解散し、後を受け継いで、松尾辰之助が大坂石笠製造所とし、

その製造にあたった。

石川県では、東京と同じ頃、明治27年金沢石笠株式会社が石笠を製造し、明治40年以後、福島県の磐城硝子株式会社でもこれを製造している。

石笠が火舎や油壺程各地で生産されなかったのは、原料調達の困難さと同時に、その製法（押型）が原因していると思われる。また鉄道による輸送力が発達してきたことも関係しているであろう。

明治末の大阪における燈用火舎、油壺、シェードなどの製造工場は約44軒のぼり、そのうち大会社である島田孫市、製硝合資会社、和田栄吉、松尾辰之助が有名であった。また北内役次郎は台ランプにおいて、西座八十松は豆ランプにおいて、木村卯兵衛、吉田岩吉、寺村民蔵、桐常三郎等は火舎類において有名であった。また小野助十郎は陶器を併用したランプを創り世評を博している。

東京における製造業者は16軒に及び、沢田暁夫、河野松五郎、二宮丑之助等の工場が規模も大きく、また歴史も古く有名であった。

燈用品が内国勸業博覧会に姿をみせるのは明治14年の第二回からである。その時新潟県の五泉玻璃製造会社がランプを出品しているが、「形状未巧ならず、宜しく舶載の諸品に照らして之を改良すべし」と審査官山本五郎の報告がなされている。以下勸業博における審査官の報告から、燈用品の状況をみると、明治23年の第三回には、高知県からランプ火舎の出品があり「品質製作共に少々佳良にして、価格低廉需要に適するものと云ふべし」と評されている。明治28年の第四回には、大阪から石笠が、長崎からランプ、火舎の出品がみられる。

「工作頗る巧妙なるものあり、且つ原料の選択も宜しきを得、光沢鮮麗にして、品質の適良なるを證するに足れり」とある。「明治27年に於て、洋燈及び同種類の輸入は減じて22年の半額より下り、自余の玻璃器も僅かに同年の三分の一にも達せざるに、却て輸出は六倍以上の多きに増加」する発展ぶりであった。この時製硝合資会社の石笠が進歩二等賞をうけている。

明治36年の第五回では、石笠類について「燈用器の改良と共に、輒近其形状多様となり、価格頗る低廉なるに至りと雖も、未だ一の改良を見ざるは遺憾なり」と評され、また「大井右吾出品の砂吹浮彫り玻璃板及び丸火舎内部摺模様
の如きは大に応用に力むべし」と、多様なランプの普及と装飾的デザインへの動きの出たことが知られる。この時、駒井庄太郎のランプが一等賞を、製硝合資会社の石笠が二等賞をうけている。

さて大正12年におけるガラス燈用品の製造府県を、その額の多い順に列記すると、1) 大阪、2) 東京、3) 愛知、4) 神奈川、5) 新潟、6) 北海道、7) 香川、8) 青森、9) 長野、10) 茨城、11) 兵庫、12) 佐賀、13) 福岡、14) 宮城、15) 山口、16) 高知、17) 鹿児島、18) 岡山、19) 群馬、20) 石川、21) 秋田、22) 島根、23) 大分、24) 沖縄、25) 広島、26) 長崎、27) 愛媛、28) 宮崎、29) 山形、となり、その間に如何に普及し、発展しているかが知られる。

〔Ⅳ〕

近世におけるガラス食器の製造は、薩摩藩、山口藩、福岡藩及び佐賀藩において、夫々嘉永5年、安政6年、万延年間に始められている。

明治になってからのガラス食器製造の早い例は、明治8年の糸永新太郎（東京）であろう。また明治10年第一回内国勸業博においては、東京の宮垣秀次郎（本所外手町・明治元年創業）が玻璃盃を、島田文次郎（北本所番場町・文政11年創業）が玻璃器を出品しているのをはじめ、愛知県の松本新平（名古屋・明治4年創業）が玻璃菓子器を、鳥山利八（三河国幡豆郡西尾中町・明治3年創業）が玻璃器を、また内島庄吉（陸前国宮城郡仙台南町・慶応3年創業）が同じく玻璃器を出品している。これらはいずれも伝統技法によるものであった。

明治12年には品川工作分局がイギリス人ガラス工、ジェームス・スピートを備い食器はじめ日用器具の製造を、所謂舶来吹き
の技術によってはじめ、明治

15年には同じくエマニュエル・ホープトマンを増備し切子摺模様の技術を職工に伝習せしめている。また押型（圧搾）製作機を輸入し、これにより鉢・皿等の扁平な器物の製作を試みている。

明治14年の第二回内国勸業博において、品川工作分局のガラス器各種が出品され有功二等賞をうけている。また宮垣秀次郎は切子鉢を、皆川久兵衛がガラス酒器を出品している。この時大阪からも多数の食器類の出品があり「伊藤契信及び伊藤庄三郎の出品は、品質佳にして製作粗ならず。殊に庄三郎の坏盤、契信の組重箱の如きは見るに足るものあり」と、審査官より評されている。

明治初年のガラス工業は「洋燈を作るにあらざれば食器を作り、食器と洋燈の製造は硝子工業の生命」であつて、技術的にも需要の上からも最もポピュラーなガラス製品であつた。その中でも食器は、製造技術は最も進歩しており、また最も早期に精巧な品物を作れる段階にあつた。

明治末葉の東京における食器其他雑器の製造業者の数は25軒にものぼり、また大阪では24軒にものぼっている。そして東京の糸永新太郎は圧搾ガラス器において、小出兼吉及び橘硝子製造所は切子及び腐飾模様ガラス器において、岩城岩太郎は切子ガラス器において、木村新太郎は各種ガラス器において有名であつた。また大阪の駒井庄太郎の製硝合資会社及び三好鹿蔵の三好硝子製造所は圧搾器において優秀であり、就中島田孫市の工場、旭硝子合資会社は近代的設備をもつ大工場で食器の製造にすぐれていた。其の他篠巳之助、鈴木福太郎、神戸政吉、森下亀吉、福永勝平、長谷川合資会社、神納庄次郎、石木正二等もまた食器及雑器製造者としてよく知られていた。

ガラス食器の製造地としては大阪、東京が主で、地方では殆んどみられない。長崎の小曾根正樹が明治11年から、彼の病没する18年までの間に製造していること、及び21年に磐城硝子会社が製造を開始していることくらいであろう。但し磐城の場合は23年に解散している。名古屋では壘、火舎などが主で食器類は

きわめて少なかった。

第三回内国勸業博において、「東京府の切子模様瓶、盃、花盛皿の如き切子最も精巧にして熟練功嘉すべし。且つ其の品質工作共に他品に超絶するの処あり。大阪府の硝子鉢は亦之に次ぐの逸品にして、青色鮮麗、切子の術亦見るに足る。同府の重菓子器及び肉池の如きも、品質良好殊に研摩宜しきを得たり。此等の諸品は独り其の良好なるに止まらず、渾て價格低廉大にして需要に適するものとす。」と報告されている。

第四回内国勸業博の報告では、「飲食器等の製作においては、猶ほ舶来品の精巧なるに遜る処多しと雖も、尚近年の改良進歩として見るべき点少なしとせず。即ち着色宜しきを得て、光沢も鮮なるものあり、又切子細工の如きは精巧にして意匠も頗る巧みなるを覚ゆ。小皿等の食器を圧搾して成型する方法は、便宜にして、製品の價格も甚だ低廉なるを以て、能く日用に適す。」また「飲食器の形状不整にして、一種類の器物にして寸法に多少の不向あるもの往々之あり。」とある。この時島田孫市の飲食器、野々村藤助の押型製品が進歩二等賞を得ている。

第五回では、「飲食物及び食卓配膳の漸次洋風に化するに従い、内地の需要を増加し、よく外国品を模するに至り、島田孫市、駒井庄太郎、福永勝平、小出兼吉等の出品の如き、中等の食卓用器として適良なり。就中酒香水呑洋酒盃の如きは、其製作装飾の方法に於て進歩を認むと雖も、品質において、素地の無色透明ならざると、硬度の乏しきは、到底外品に比すべくもあらず。切子等折角の装飾も為に光輝を放たず」「押型製品は皿類コップ蓋物類多く、製品能く其価に適し、製作亦た進歩せり。殊に糸永新太郎、水谷銀次郎出品の皿類は良好なり」と報告されている。

ガラス食器のうち最も需要の多かったのはガラスコップであろう。ガラスコップの普及は、明治19年キリン麦酒会社が、20年に日本ビール会社、朝日ビール会社が設立されて、ビールが普及するによる処大きいと思われる。お茶や日

本酒を飲むには気分のでないガラス食器も、ビール、洋酒、水を飲むには用いられ、又、夏の冷味をさそう食器として次第に定着して行くのである。

さて、大正12年におけるガラス食器製造府県を、その産額の順に列記すると、1) 大阪、2) 東京、3) 新潟、4) 福岡、5) 京都、6) 富山、7) 神奈川、8) 愛知、9) 高知、10) 宮崎、11) 群馬、12) 青森、13) 山梨、14) 岡山、15) 愛媛、16) 秋田、17) 山口、長野となり、次第に各地でも生産されるようになってきていることがわかる。

〔V〕

わが国の珐瑯鍋の製造は、江戸時代末期、加賀前田藩主が外国より工人を招聘して作らせたのが最初とされる。

明治になってからは、明治5年、金沢の人佐野参四郎が最初であろう。「私儀、先年来、鉄鍋内面へ、陶製薬を焼付候儀、発明仕候処、第一銑鍋腐蝕を防碍致し、新鍋の錆を止め、煎焙品の食味を変不し用、薪炭の入費を減し、実に有益の品と存候に付、今官許を受て、右品普く海内へ弘め申度志願に候間、御望の方は、価相応の値段を以指上候間、御求可し被し下候様云々」という広告を明治5年3月刊、金沢の「開花新聞」に載せている（明治事物起源）。

明治10年頃大阪の人、五雲堂弥兵衛も鑄鉄鍋に珐瑯を施す法を考案し、また愛知県県の広瀬与左衛門も万古焼の釉薬を改良して鍋に施すことに成功したといわれる。

鉄板珐瑯は、明治18年金沢の旧藩士和沢与一が天田弥太郎と共に研究し、大阪の小田新助の出資により、輸入鉄板を用いてプレス製造したのが最初とされる。技術幼稚な為無格好なものであり、5寸丸鍋が10銭、9寸丸鍋が20銭（白米1升5銭、工賃一日10銭）と高価なものになったため、其後セメント空缶などを打延ばして材料とし、水压机や動力を用い、また中沢岩太、藤井恒久の指導をうけるなどして改善を計り、明治27・8年頃には、皿、碗、コップが陸海軍

用食器として採用されるに至る。

明治23年に荒木正俊が茶瓶を製作。この頃には2～3の製造業者も出現している。

明治32年に和田惣八が飯蒸器を、35年には田中寅吉が手巻縁の洗面器を製造している。

明治33年4月、内務省令第15号食器取締規則によって、当時一般的であった有鉛珫瑯の使用が禁じられ、以後無鉛珫瑯の研究が行われるが、明治33年兵庫県住吉村の手島某により無鉛珫瑯が製造される。この間国内需要は増加し、明治37・8年頃には大阪市で7～8名の製造業者をみるに至るが、次第にアルミ製品にその座を譲っていく。

当時の珫瑯製品の種類は、洗面器、皿、匙、碗、鍋、茶瓶、痰壺、弁当箱、便器、杓子、コップ、シェード、コーヒーポット等であった。

次に、アルミ食器、厨器類については、明治27年に、大阪砲兵工廠で飯盒と水筒を試作したのを嚆矢とする。明治29年ドイツより飯盒及び水筒の製作に必要な圧搾器、旋盤機等を輸入し、明治30年より大阪砲兵工廠で飯盒を、東京工廠で水筒を本格的に製作しはじめた。この点前述のガラス器や後述の洋食器と全くその誕生の経緯を異にしている。

明治31年頃から、大阪砲兵工廠では飯盒の他に火薬入れの容器、食皿等の軍需品を製作する傍、鋤鍋、丸鍋、丸弁当箱、角弁当箱、水呑、コップ、牛乳沸し、酒燗容器等を試作していたが、明治32年頃より、欧米視察より帰朝した大阪砲兵工廠督理太田徳三少将の意見により、大阪平野町の金物商松尾徳蔵及び京都の大沢商会の手を経て一般市場へ売りだされ、はじめてアルミ製品が消費者の目に触れるようになるのである。

其後、明治34年大阪砲兵工廠にいた小谷春次郎が同僚3名と共に共同組合を組織して民間で初めてアルミ製品を製造し、平野町の金物商高木鶴松の手を経てこれを販売した。後に高木は高木アルミニウム製造所を設立（後の日本ア

ルミニウム), 飯盒, 丸鍋, 杓子等を製造し, 36年池田沢蔵がアルミニウム器具製造所を設立して鋤鍋, 丸鍋を製造している。また那須アルミニウム(東京)もこの年に創業された。

当時はアルミ製品に対する一般の認識が浅く需要は多くなかったが, 明治37年頃には小谷等の製作した食匙, 茶碗, 箸, 茶卓等が朝鮮へ輸出され, また37・8年の日露戦争時には多量に生産されている。

アルミ製品の实用性が兵士等によって宣伝されて一般の認識も高まり, 明治40年頃から需要は次第に多くなり, それに従って加工業者も年々増加し, 明治末葉には大阪市で約10名にも及んでいる。

明治43年頃, 松尾アルミニウム製造所が胴と口とをハゼ止めにした湯沸を発売し, 更に大正6年頃日本アルミニウムが熔接による湯沸を製作し販売する。

この様に, 技術的な製品改良と値下げ攻勢によって, 珞瑯製品をはじめ他の金属器, 例えば燕の鋤起銅器や南部鉄器の様な在来産業を駆逐して行くのである。

大正3年の第一次大戦を契機として大小の工場が雨後の筍の如く簇出し, 更に急速に一般家庭へ浸透していく。明治末から昭和初期にかけてアルミ製品は全盛期を経験するのである。

明治35年, 高木アルミニウムの厨・食器製造品目は33種であったものが, 同41年日本アルミニウムには220余の品目にまで増加していることによっても, その普及と発展ぶりが知られる。

[VI]

洋食器の主なものは陶磁製と金属製であろう。

わが国で初めて陶磁製の洋食器が製作された時期は明確ではない。しかし明治5年に初めて京都で博覧会が開かれたとき, 京都の陶工幹山伝七(文政4～

明治23年)がコーヒー碗皿等を出品しているのは早い例であろう。この時明治天皇の臨幸があり、彼のコーヒー碗皿等九種が買上げられている。この実績によるものであろう、翌6年、外国貴賓を接待するための洋食器75種の焼成を宮内省より命ぜられ、上納している。その製品は日本食器とは形態が違い異様の形であり、また大きな器であるため京都人士の耳目をそばだたしめたという。それ程洋食器は珍しいものであった。彼はこの仕事を遂行するために100名に近い使用人をもつ大工場を建設し、また優秀な職人を多数集めている。

明治10年第一回内国勸業博に洋食器の出品がみられる。即ち

- 磁製洋酒盃等——山口仁三郎(東京府東紺屋町)
- 磁製珈琲具等——加藤繁十(尾張国春日井郡瀬戸村)
- 陶製洋酒盃等——涌井貞治(羽前国最上郡金枝村)
- 陶製珈琲具等——安倍覚右衛門(羽前国村山郡平清水村)
- 全 上 ——佐藤吉郎次(全 上)
- 全 上 ——丹羽清三郎(全 上)
- 全 上 ——伊東藤十郎(羽前国村山郡岩波村)
- 陶製洋酒盃——丹羽治四郎(平清水村)
- 陶製西洋食器等——笹田蔵二(加賀国石川郡金沢南町)

以上のうち、山形のような一地方からのコーヒー具の出品は興味深い。平清水焼は寛政頃(1789~1800)に生まれた窯である。

明治初年、京都粟田焼の錦光山をはじめ、陶磁器輸出のブームを現出する。一般的に当時の陶磁器の輸出品は、美術品、骨董品として受け入れられていたものであり、異国趣味を売りものにしたものであった。しかし海外需要(特にアメリカ)の動向は、明治15年頃より美術品から健全な日用品へと移行しつつあり、当時の陶磁器業者にとっては欧州先進国のものに比肩しうる洋食器を製造することが死活に関わる焦眉の課題となってきたのである。

コーヒー茶碗がアメリカ人の生活にとって欠くことの出来ないものであり、

需要も大きいこと、従って是非これを製造すべきであることを、フランス製の

見本を添えてニューヨーク森村ブラザーズから森村組へ要望して来たのは明治16年のことである。早速瀬戸の陶工川本榊吉に製作を依頼し、彼はこれを苦心の未完成するが、まだ湯呑に把手をつけたものの様で、見本に比べて見劣りのするものであったという。またコーヒー茶碗1個25銭、受皿1個25銭、画付け（九谷風）に最低30銭、最高1円を必要としたので製品は非常に高いものについたという。しかしこの為に、瀬戸の陶業界は飛躍的な進歩をとげ、周辺地域でも和物から洋物への急速な転換がなされるのである。

明治初期の輸出陶磁器はほとんどが九谷絵や肥前の錦手などで、「地色に玉子茶ボカシ、金盛粟穂に小菊」模様が流行し、長年この画柄が続いた。

明治26年シカゴ万博を契機として、森村組の手で、ドレスデン風の画へと洋風化の試みがなされる。『明治41年11月在市俄古帝国領事館報告』に「紐育森村組ニテハ欧州品ヲ模シタル意匠ヲ考案シ当市ニモ是等ノ製品市場ニ上ルニ至リシカ是等ハ一見日本品タルコトヲ知り難ク殊ニ当国人ノ眼ニテハ之ヲ識別シ能ハサルカ如キ有様ナルヲ以テ売主モ日本品ト称セスシテ売捌キケルカ其結果却テ良好ナリト云フ……」とあるのは、当時の「洋風化」の実体を物語るものであろう。

森村組のこれらの画付けは、東京の河原徳立、杉村作太郎、京都の石田佐太郎、名古屋の西郷久吉などの工場が行っている。

とも角この様にして洋食器の体裁を整えて行くが、「地質白カラズ又堅固ナラズ且ツ形ノ不正整」（41年3月在桑港帝国総領事館報告）である点で未だ本物に至らず、明治27年頃以降白色硬質磁器への挑戦がなされる。森村組では飛鳥井孝太郎を招き研究しているが思わしく行かず、明治29年松村八次郎が、次いで中村弥九郎が純白硬質磁器を發明、製作し、其後日本陶器合名会社、千種製陶合名会社の近代的大工場もこれを製作し輸出するにいたる。

明治38年日本陶器合名会社設立当初の頃の主な製品は、ボンボン入れ、化粧

揃い、コーヒー茶碗、チョコレートポット、土瓶、砂糖入れで、明治41年頃からディナーセット製造の本格的の研究に入る。そして大正2年8寸皿の試作に成功しディナーセットの工場生産が開始される。

明治末葉には、まだ洋風高級陶磁器の国内需要はきわめて少なく、主として英、仏からの輸入によっていたが、日本陶器では明治41年頃から国内洋食器市場の開拓にのりだしている。まず43年には宮内省へ納入、44年頃からホテル、レストラン関係の受注をはじめている。其他三井、住友をはじめとする財界人、海軍省、洋食器店、デパート、欧米旅行、留学経験者と云うふうに需要層も限られたものであったが、172 揃などの豪華なものもあったという。デパートは当時まだ大衆化されておらず、需要は大きくなかった。

地方では洋食もまだなじみなく、旧来の木器、漆器を漸く陶磁器に変えて行くとする時期にあつて、まだまだ洋食器は縁のない存在であった。

一方、金属食器の場合、ナイフ、フォーク、スプーンが主体だが、陶磁洋食器とは若干異なつた経緯をもつ。即ち、金属洋食器のわが国における製造が、大正3年（1914）第一次大戦が勃発し、外国が日本に供給を求めるにいたり生産を要請して来たことにはじまるということである。

尤も金属洋食器は明治年間東京においても生産されてはいたが、生産費が高くまた品質も劣っていた処から、輸入品に圧倒され中止してしまつていた。

新潟県燕市は金属洋食器の生産地で知られるが、江戸中期より鋳起による銅器生産の行われた所でもある。銅器には厨房用品と高級品とあり、明治9～10年頃にはアメリカをはじめ世界各国に多く輸出していた歴史をもっている。しかし、明治中・後期のアルミ製造工業の著しい発達は、厨房用品分野において銅器を追放し、燕の銅器産業は大きな打撃をうけるのだが、第一次大戦時に至り、東京、大阪方面の大問屋から外国向洋食器の大量注文をとることに成功し、これが契機となり燕の町ぐるみの洋食器生産へと発展して行くのである。即ち、発展過程を年表風に列記すれば、

大正元年、捧吉右衛門、大阪商人にスプーン、フォークの製作をすすめられ、木の柄のフォーク及びスプーンを試作する。(東京光沢洋食器店製の姫フォークを模倣)

大正3年に、重松重一が姫フォークを試作。同5年に、ロシア向けナイフとスプーン(大型のもの)日産二百打注文が舞込み、捧吉右衛門が洋食器手仕事を機械化する。6年に捧兄弟は森村南洋株式会社の手を経てジャワへ洋食器を輸出し、7年に中国、満州、英領インド、蘭領インド、南洋方面へ輸出する。またこの頃よりカフェ、バー、喫茶店が流行しはじめ、洋風生活も次第に普及し、洋食の流行にともない食器の需要が多くなって来る。そして大正8年には大景気を現出し、同9年には国産品奨励策(銀メッキ十割輸入税)によって更に発展する。宮内省及び華族会館より燕洋食器が買上げられたのはこの年である。同10年頃より、家内制手工業から転換した工場制手工業は更に機械化工業へと転換し、量産の時代に入るのである。そして、漸く国内にも普及しはじめるに至る。

因みに、大正初期における燕洋食器の生産、販売状況を見ると、

大正4年、生産数量 40万ダース

(内地向と輸出向の比は3:7)

同5年、250万ダース(2:5)

同6年、350万ダース(1:4)

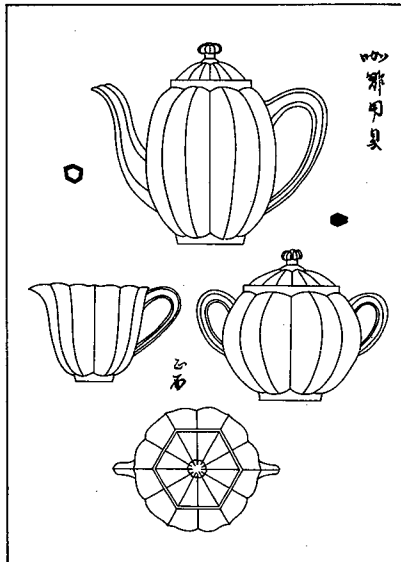
同7年、500万ダース(1:4)

同8年、400万ダース(2:3)

同9年、300万ダース(17:20)

同10年、320万ダース(1:1)

となり発展の状況が知られる。そしてこれより以降内地向は次第に輸出向を上廻るに至るのである。



コーヒー用具(陶器図鑑、明治36年刊より)

〔VII〕

以上概観してきたように、文明開化という新しい時代において、発生し形成される過程が、夫々異っていることに気づく。文明開化とは即ち西欧文明の移入であり、模倣であり、その点では、ランプ等燈用品、ガラス食器、洋食器は、それがそのまま文明開化であったといえよう。これらはいずれも、その初期において、在来技術から新技術への移行が連続的に行われている点が共通している。即ち在来技術によって「よく外国品を模倣」ことから出発し、次第に洋式技術を取り入れて成長していく。ただ、ランプ、ガラス食器は、日本の現実の生活を対象とし、民衆の需要に対応した製品作りがなされたのに対し、洋食器は、初めから日本人を相手とせず、外国人の需要に対する供給を目的として発生し、形成されていった点で大きく相異している。その意味で、ランプ、ガラス食器による文明開化は日本人の生活にとってより直接的であったといえよう。しかし、洋食器は洋風料理と一体不可分のものである故に、洋食器による文明開化は、洋風料理の普及という食生活の変革を前提として成立するものであり、その点、日本人の生活にとっては、本質的に、より間接的なものであったといえよう。

汽車土瓶はこれらとはまた事情を異にする。即ち、西欧の模倣ではなく、新時代に対応して、日本の生活風土からごく自然に発想されて発生したものであり、文明開化そのものというより、むしろその副産物的なものといえることができよう。従って在来技術がそのまま通用すると同時に、日本の生活、感覚、ものがそのまま通用しているのである。

琺瑯の場合、やはり七宝という在来技術の上に、鉄器、陶器の欠点を補うものとして発生し、陸海軍という特殊な文明社会の要求に合致して成長しはじめる点、特徴的である。しかしこのことは、アルミの場合において一層顕著である。新材料、新技術であることにもよるが、他の場合の様に民間で発生するのではなく、最初から軍が軍のために開発を行い、それが民間で形成されていく

という点で全く発生、形成の過程が異なる。そして、その実用的特性の故に、「軽銀」と呼ばれ貴重視されながら、ガラスや陶磁のような趣味的或いは美術的雑器としてよりも、鍋、コップのような極めて日用品実用品として形成される。そして、その実用性、合理性、経済性は在来産業、在来技術、また在来の生活感覚、美的感覚をも一面において追放していくのである。しかし、これは文明開化というものの、一つの行きつく先であったとも云えよう。

文明開化期は、また農業社会から工業社会への移行期でもある。日用雑器の発生と形成において種々なタイプのみられるのはそのせいでもある。汽車土瓶のおっとりとした風貌は、それが農業社会に基づくものであるからであろう。

アルミ製品が全く異った発生、形成の過程をもつのは、それが本質的に工業社会のものであったからである。

参 考 文 献

- 日本陶器七十年史
- 明治十年内国勸業博覧会出品解説
- 明治工業史
- 明治前期産業発達史資料
- 日本近世窯業史第三編陶磁器工業
第四編硝子工業
- 京焼百年の歩み 藤岡幸二編
- セラミックス 10 [12] 1975
- 陶器図鑑 春名錦山著
- 信楽焼の鑑賞 富増純一・溪逸郎編
- 明治事物起源 石田研堂著
- 陶磁器及土器、漆器、硝子類及其ノ製品ニ関スル調査 鉄道省運輸局刊
- 大阪の磁郷鉄器工業 大阪市役所産業部編
- 大阪のアルミニウム工業 全上
- アルミニウム五十五年の歩み 日本アルミニウム工業株式会社編
- 中小工業経営の研究 中林庄太郎著
- 日本工業史 南種廉博著
- 其 他